復讐
奇談

安積沼

へ13
3146
3

小幡小平次死霊物語 復讐安積沼 巻之三

東都 山東庵京傳著

門人 拜田泥牛校

第五條

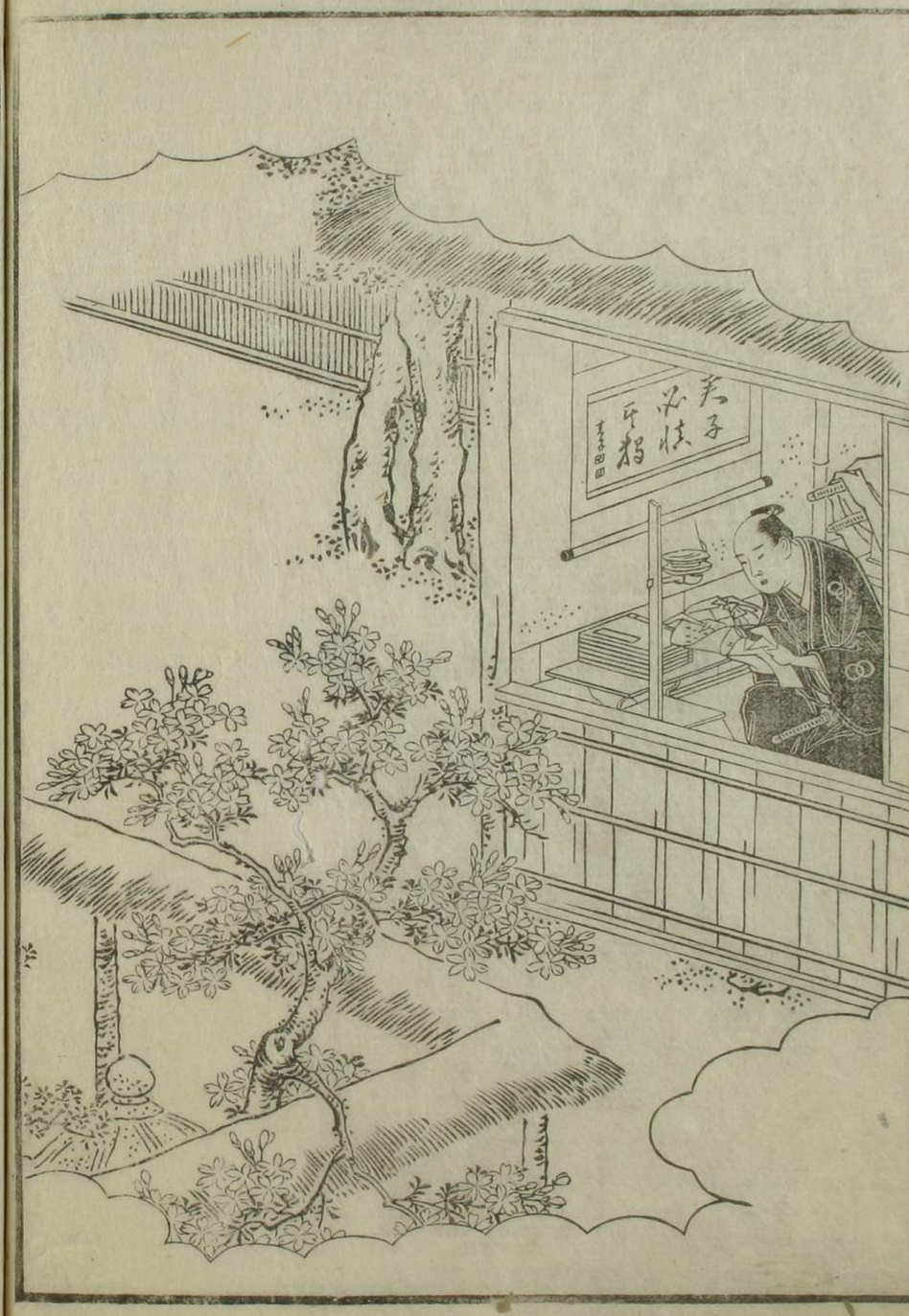
希婦細布暗媒佳會事
并 信夫摺絹注血告想事

山井波門いあけくれ。仇人雲革がゆくゑを尋出さんとて。心を苦しめる郷ふ。陸奥に逃ゆりて彼地ふ住くれ住うゝ尋出して。罷立ごゝに思ひいそぐ〳〵家をうりはらひけき道と陰奥にゆりりぶ。仇人南部ふ住うゝ尋てゆくゆをを知て。廣國のゆゆて。遠に探索べき便もかけとバ。權丑氏地ふ住まて家ふべゝとゆりひさごめ。當國侠布里ゝゝ所に權に小家を索

へ13
3146
3

て住ぬ。此所にみちのくのそて少て俠の細布と云ハ。此里の婦女等の
手業にかける布こそ。さすがに俠さ布なれバ。古歌ハ。そらふの細布
かどせてこそ。胸あひぐさなるべしとなるあり。蒙ハ又は里に。須賀
屋三七とゝ高人あり。此所にて青表の藩ハちりけきバ。當
國の土産。信夫摺の絹。安達絹。細布。紬。紙布。陸奥紙。十符
の菅蓆のさぐひまでも。買あつ。諸國に祝まりしてこれを
ひさき。家をゝぶり富ゝ。むかしの女児とゝもて名をお浅
とゝぶ。年ハ已に十六歳。鄙人まいとめづらしう生れて容
のみやびやかなる。梨花ハ雨とそゝぎ。白玉に香とそゝぐ
ごゝ。ちのゝゝぞるも拙うして書て。欲学のゆもおゝしれ
ずけれ。好ハ原都人なりしゆゑに。足曳のこゝをおろく物ゝえ語

て。彼にとゝえ言語も都のものいひと学ぜりれバ。國ぶりのゞみゝることを
ざゆふハあゝでさゝぐゝ。雪のふりゝひやゝる声に似ゝる。のちくゝよゝき
婚とゝでんゝて。父母涙くゝめでいろくゝみ。家も貧しかれ
ばいろゝ衣を着せて。少ゝよく粧ハせれば。ゝゝく都人ともぢ
ざる姿。かくうくゝさ女児なれバ。安積のぬまれあやちぐさ
ひく人ゆゝく。迫き村くれ若人等。ゑゝひて。まに要ゆを
あゝゝそゝぐも。皆田夫野人のむくつけき者ゝて。頭の毛ハきざ
み昆布とかつぐゝいぶう。頬髭ハ猟虎皮の覆面ゝゝるゞ
ごゝく。皆脳脚蹴の眼ざしに似て。蝦夷熊のやうにあらく
しさ男ぞもうれバ。むゝゝて。お浅ゞゝふうるハ。門
ふゝえざる媒人の杖も。禅本の立ゞゝ朽るに似ゝる。お浅ゝ


美子
必快
平稱

小樓上に住て。細布をおることをよをさびしくてゐるが。この樓し波つが家とむこひ合るハ。此一件の珍事と惹出せべき場あらんと。一日お淺横えよりの。偶波つと臨るゐて。村落人の目をおこゝろに。目馴ざる美男なれど。忽心迷ひ妻ゆへかゝる人もありるよと。魂そゝれてさぐら酔人のごゝく。たゞら茶湯をあゞへざるしが。此日より哀の室擔とおひそめて。毋のひハ胸にみらめくれいたで男ぶとえぞ知ふ。雀碑ゝさゝゐてもゝ心のふゞをちりだらう。傳へまゐ〳〵く。艶出を毋ゝこゝ哀ぐゐれども。波門ハ大望と挑ひ。内の間も仇のこゝを忘ぎれがゐる放逸こゝふいさゝゐもふゝゐどゞ千東の通ハせ文も。阿武隈川の堤木ゝを。て一言の返答もせどつひふ此年もゝれぬ。お淺ハ只波つがんつゝ

きと深く拒ゝ。繁撓山に年をへて朽や果なんし涙ハ独に乱を落て。白玉の緒絶搖の名もつらゝ。人の心の奥の海のあゝさ儀をとにより私もゞふとつゞゝれ。ひとゝやまとのゝゐゝ。一夜波つ窓の下に書ゝを。を炎燈火かゞげつ。書を読て居るゐゝ。仍てらん机のおにたゝとおちゐ。惟しゝをひゝゐゐあげてゐるに釵見にゐゝをつけゝゐあゐ。頃にひゝきゐれが。信実物の縫のきれが血とゝゐて書ゐるゐゞゝべゐもゐゝゐ。お淺が筆ふて其文に。妾鄙人のゐゐゞゐゐ身とゐておて人と哀をゐゝ。仇をゞゐけひきふゐざるもゐゝふゐれど。女子の身ゐてゐゐゐゝゝこゝの数ゝを尚ゝさこゝゐれが。仇の報ありてゐきゐゞらふべゝかゝて哀ゐんも毋のゞ命ゐれが。今宵縊て死んゝをゝゞゐゐ。妾泉下の人と

なくべ。雲ゐたちもあられと丹ぐ〜ゐられうと。ろ〜きものい作ま
山下ろふ葛のうゝみとこゐ。切るる心をうゐやふのべて。そそ丹くの京に
一首の歌とゝきつけつ

安積山影さへゆる山の井れ淺き心ハ我丹ハまくに

波つつゝくゝよみ丹ろて思ひるゐ。これハ萬葉集にのをる和ろ
ゐあて。むゝ葛城大王尚國にくゝ五ひゝ時。采女ろる女の
よみて奉ろゝ歌。家性を山井といひ。彼ゞ名を淺とゐよろ
山の井の淺とつゝきる此歌とゝきて。ゐゝ人さんとゝ。又作
夫相の絹にるをゝん。ろまでに丹ひと思ひ出れとふ謎ある。
此ゐをふい画暦ともちろ和ろ人あって。俳家とよむ人ぶにまれくろ
ときゝつるに。ゆろ鄙人ふいめづらゝくゆしき心ざゐろ。ことか

なろ思ひつめろる心とむげめて。非命に死おうんハ便
ろ所ここゝろゝ丹ひつ。日ごろの後んもとろけ。前後とろ
えろうんざしてぞそゝゝく逐出をもゝゝ。文禄よろろけて。
彼横上を的にあげあげろりお洗ハをゝ盜死んとおる
延ふ。ろひろけど波つゞ逐出を得て。傷ゐ甦醒ゝゝゝゝ。急
きまゝゝひて。ゝれるれ。んの底をこゐやろれのべて。今霄三九
更のゝろ横上ゐ無びのゝゝん。背尾ゝくゝ丹けとゝゝれば。
ゐゐろゐれゝゝさに心頭突ゝゝと跳りてゝるゐもさゆくゐろゐて。
只夢ゝとのゝゝぞ思れる。ゐゝ三更の鐘もゝきれた。波門ハ
人の森ゝづまりゝる氏窺ひ。横をゝゝて窓にけ。つひに横に無び
のゝれだも洗ハをれとゝるゝろも。波つふひゝをゝゝさて。胸ゐろ

さる日ごろの恨くせさくる涙にあらハせろ。波つも宮木にあらぐれ
た。彼が情のつくれふあで只脊とるでくるごもりるが。歩もや〜更ぬれバ。
お淺波つが多伐鶏へ鶯衾にいざうひて。日来の幽情花月乃
佳會娛樂あげてつくべるず。已に襄王の夢醒て。おぐらく互の
志をくるるに春の夜のあけやすく。勝月影傾斗星闌干
さしてたや曉にちるれば。波つ驚て別出うんとも。お淺袂とひく人
て

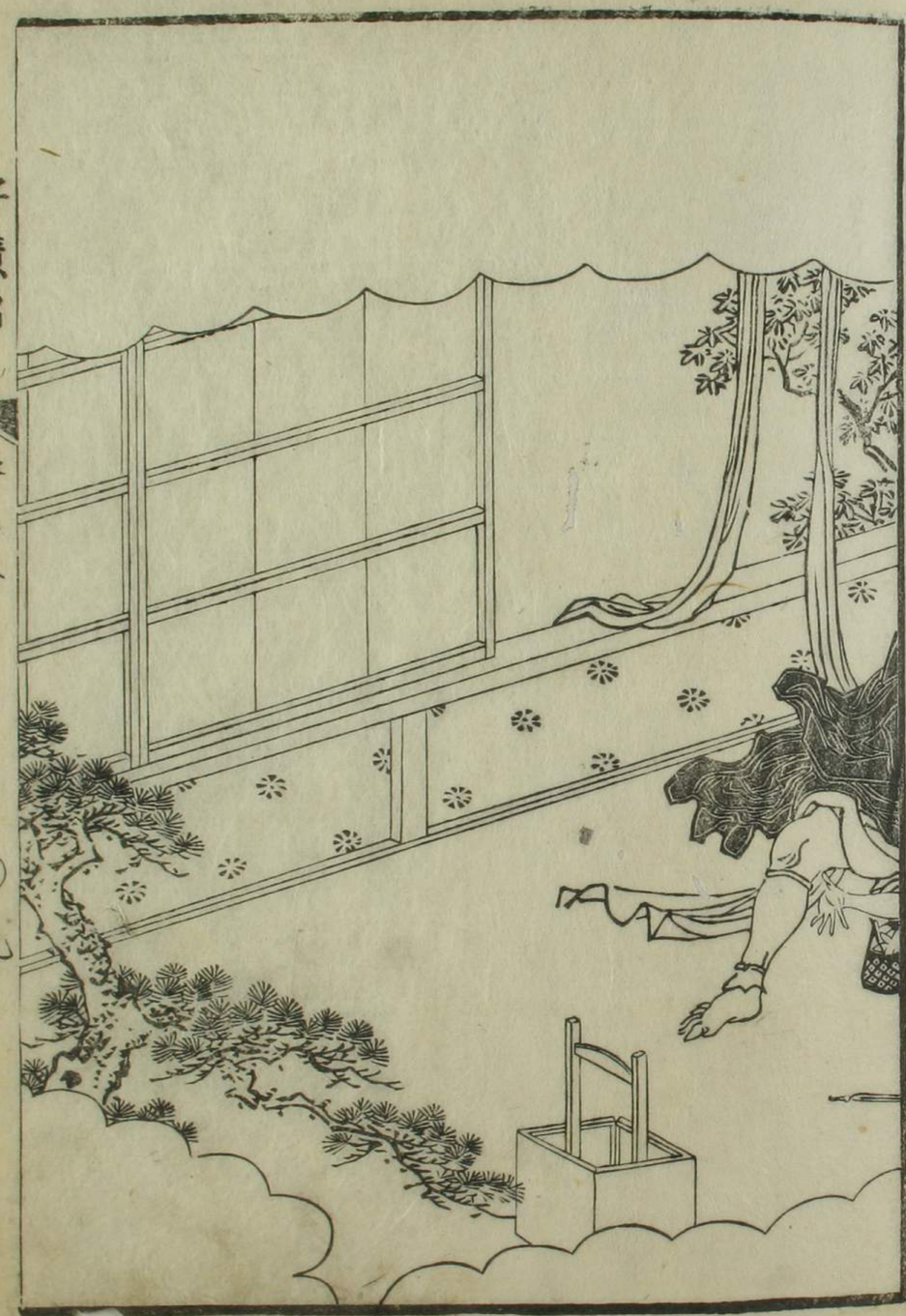
ねもひあるとは不ぞれば。細布のむよあひぐるる袂ぐるさ
ぐるみてうちられば。波つも一絶を吟じて別まる歌をうむ

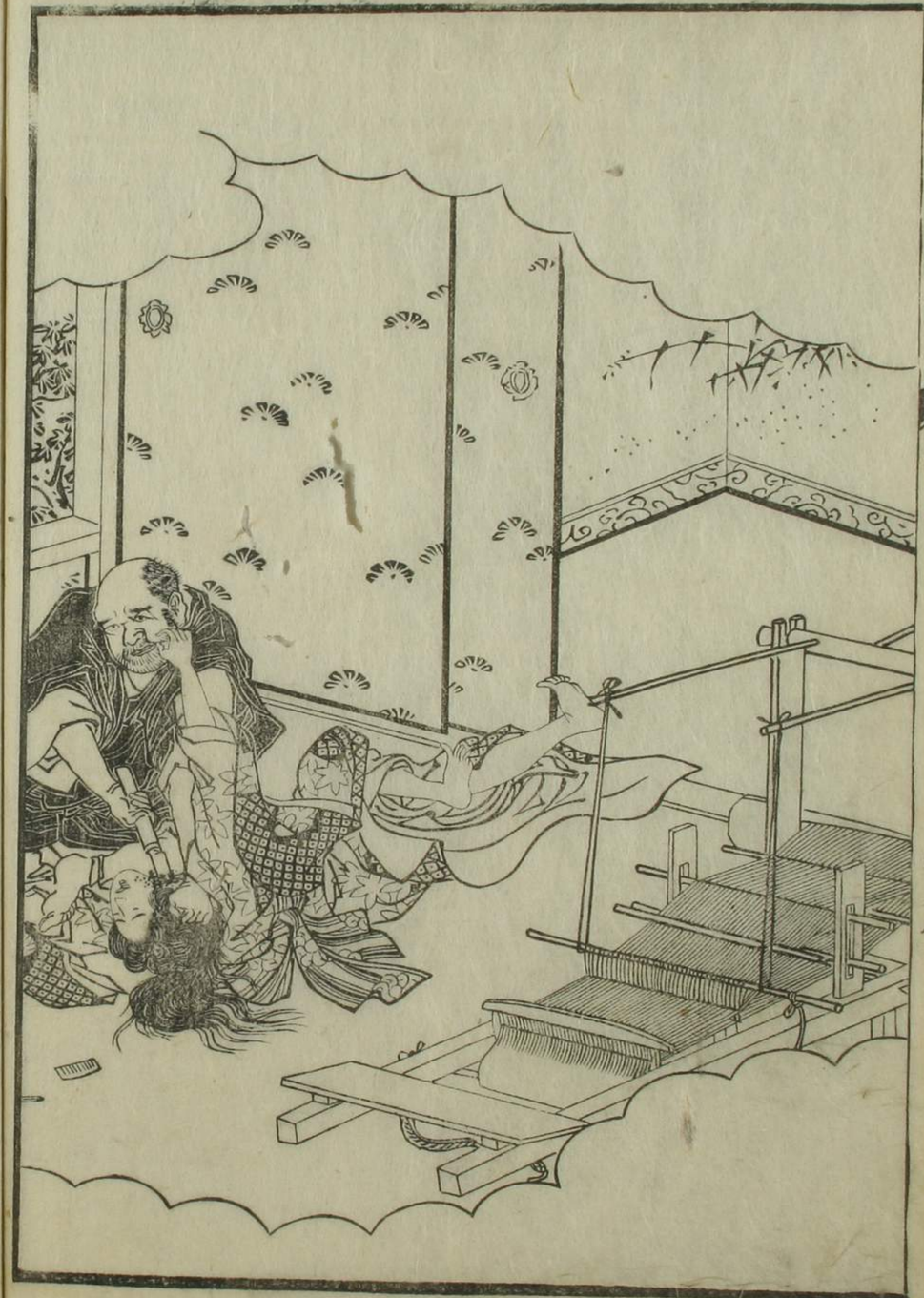
偏憂合歓夕　頓有別離時
自嗟還自慰　不是遠別離

お淺これと受てよろこび。手織の細布と把ていろく。氏樓に梯と
りけ。り一人のやさうひにて。外られうがるるし〜ぬるまじ。これろ後
郎道ひ易で妾先樓の枋に員本とそるのくおれた。氏布と沒て。まハ
員本にりけ。宇ハ樓の下小垂おく〜。郎氏布とまふうて緊
とらく人多人。妾上ふて弔上ヤさぐ人目にかることあるあり。波門ぐて
く。其員本とふハ何物ぞ。女の弱さ力ふて我とる引あぐるる。おそらく
ハかあるまじ。お淺笑て。郎員本をうるせ玉ぬもこそうあり。これハ
農家ふある器にて。九き木と設。拙とりけて〜〜これかとうちひど
して。重とうごるる物。碾輪のさぐひの差あると告られば。波つうあづきて。
これきハあて良計うとふ。お淺又いろく。郎がつれうんんを招くて。
縊死んと思ひ外しも氏布あり。今亦氏住舎と塀をるも氏布あり。

禍うて福とするこのうれしさをいくだ。彼ついまもく彼が恙
の事と感じて。つひに別去ねがらしろ後ハ約のごとく布にもぐろく
思びひら。則布を収めかくし。飯る時ハ又これを垂て掛を思び下り。互に
志の深きこと。山盟海誓て水するすゝぐ。ア。えにるかゝて時〻期を約
して思び遇ことゝ已に半年にあるるを。を之の老ども。ハきゝてことゝ
を知れども。只ふ淺ぶ父母のこゝ事なるも知ざるなり。彼つハ原素出
画おゝび備くの技藝ふ達しる史に。所彼紹の酒宴の席に出ねる
れるが。これも仇人を探ら便るもるべきまとおりひて。ぐらハしさ式
いとハどまねれ行ぬ。志るに一回近を速語とつよ不の某ゞ家ふ
也さて。繪をかさるるあるしゞ。あるじ酒肴とそゝめ。夜深まで
ゝあてりてゝ。れば。彼門ハ式夜お淺と約せしゝとをさゝ

志をさら爰に又一人の僧に現西といふ去あるり。夜く徑とゝ
念仏とゝゝへて村くとあるきまのうちを乞るが。式夜三更の
ころ三七ゞ家のおとをうざらて。樓ふ細布の地ふ垂る式見た
け式家布を晒井きて。忘れて取収ざるものゝ。これと倫ら
ばゝに酒代るべゝとゝるら點頭。ひそに立よりて布にまとゝ
る不ふ。樓上に人あるて忽弟上しるぶ。式僧驚きこハ何ゝ多ぞく
ゝふうら。漸ゝに扯上られ係ふんつきてこれい必式家に不義を
ゝると女あるて。私夫を接るるべしと思ひつ。彼に任せて弟上
られ。已に樓上にいる時果して義麗女児あるて。式布をさゞり居
しる。是乃お淺なる。況西人のうちにようこび。女児ふむるいていい
るハ愚僧いちゞろ他郷より式里に移来れば。君ゞ。これ美人





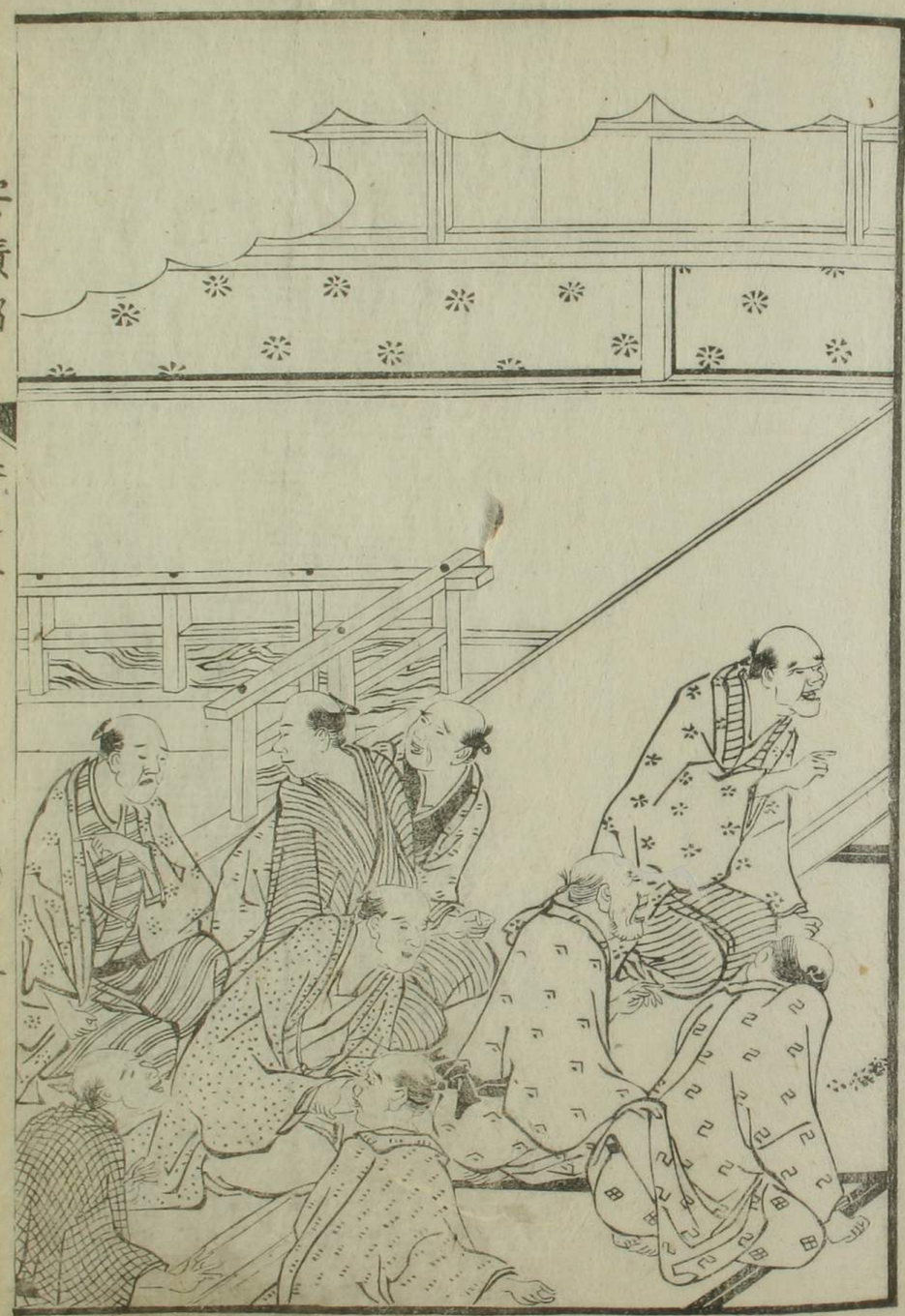
こゝにあること成ゝ。ぞ。ちるに今男ひとけぞ。ぶ而へ弟上られて。
君の次女と見るハ誠是源き因縁あり。も〳〵今夜愚僧さ一
霄の宿をめぐみ給ハゝ。福田ハ海のごゝ恩徳ハ天〳〵むと〳〵
かゞ〳〵偏に慈悲とゝれ給へといひつ。身をゝゝてようをひけきバ。海
ハ大に驚きて武僧と覗るに。書き頃中とゝり海松のごゝに彼と
うゝ衣と着〳〵面ハ鵜の底に似てくゝ。眼ゝるぶく髭ゆて。こんぐ
〳〵悪僧なれべ一目ゝるゝも只うちちかくきて居るゝ。粥〳〵と志
づめていゝ。女子ひとゝとあかどゝてみぶりあることいひあゝる。妾今
書風のごゝに縁と得て。その人をこそ待つるにいでゝ神身のごゝくむき
げ身る出家に武身と矣んや。さハいへ神身ところに弟上〳〵へ妾
ぶ誤とあれば枉て武布とゝぐむべ〳〵。れとゝて速に武横を

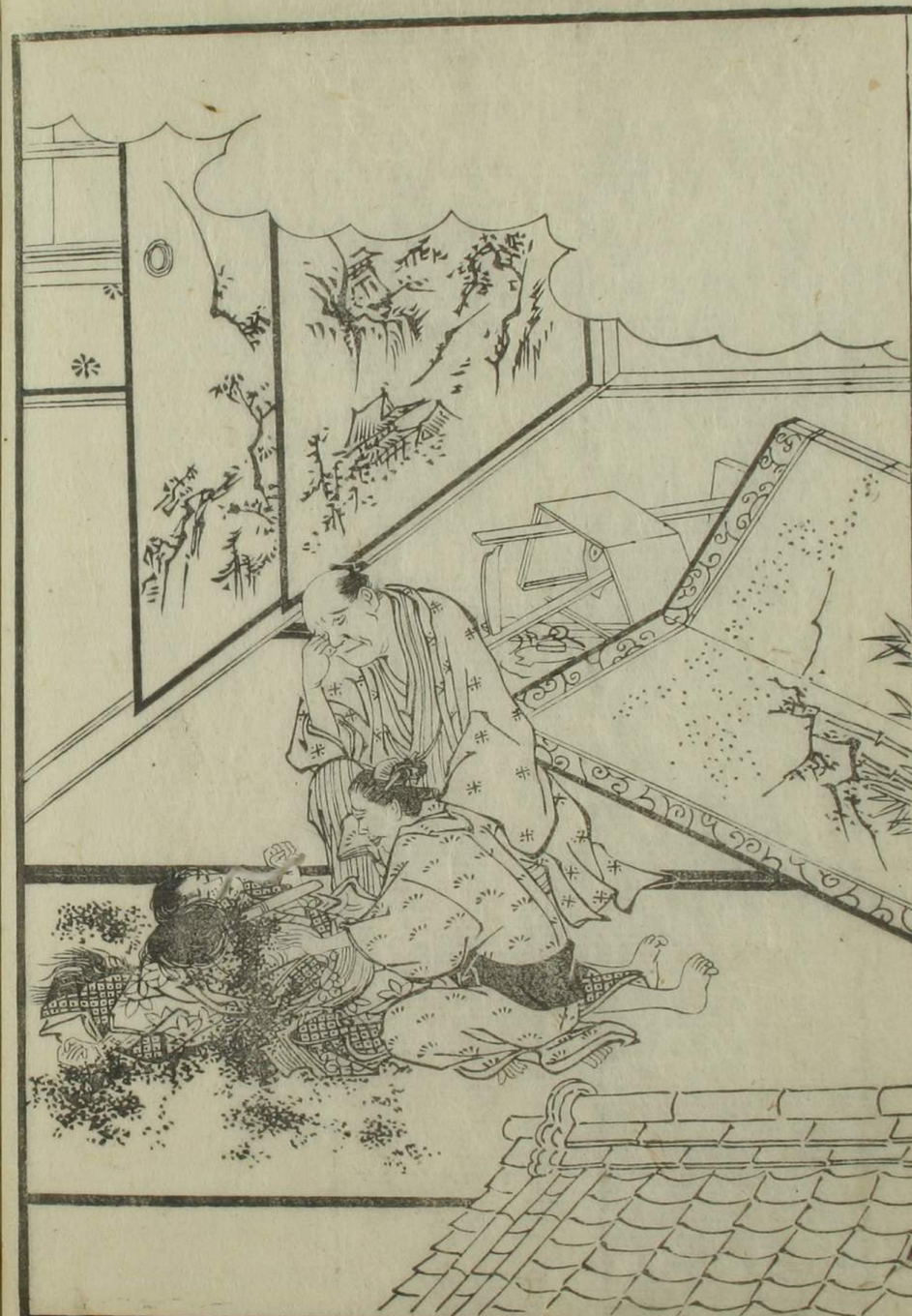
立去ゝ給へ〳〵ば。祝西がいゝく。原我好ゝて武横ゝ上るにあ〳〵ば。君〳〵
づ〳〵ゝ亦とゝに弟上ゝ神さて。今にいゝてむゝ〳〵ゝれとハ行ゝ。
布と切て行ゝ。ぶ非亦ゝ不ゝぶひゝ。ぶいひてゝ〳〵ゝより抱き
付。ちゝ身ゝる武の腮を以て。お浅が新ゝ。ちゝ武ゝ。眼をゝをして鼻き息を
吐れば。お浅ハ只皂雕ゝつゝ。ゝれゝる紫燕のごゝに。身をちゝそのゝれん
とゝれゝも。祝西ゝ〳〵抱てゝるゝさゝ。お浅ハゝゝものゝとん身をあせゝ
れば。裙ひゝゝゝて白脛をあゝハ。衣ゝゝゝゝる蓋抱。いとけゝゝく也
ゝて。祝西ゝ鼻を襲ゝ行を以てゝ〳〵ゝ去のゝへき。ちゝに春心發動し
恰も餓虎羊羔と見つけゝるごゝくのいきゝひゝて。自ゝれと制
をゝことあゝハゝ。むゝに捻倒やゝゝみゝゝゝきゝを
ゝんゝとお浅ハゝゝに声をあげ。賊ゝゝとゝゝひゝゝ。

此時しも夜深まれど家内さべて熟睡し。忽声と共付そ。お清
ハ夢か幻かぐらりぐらりあそ。現西ハ人の起来らんこと成おそれ急
にせまりてかさいこにあり裁刀とひろひ。お清が咽にぐさ〳〵つき
さしたれば。阿と一声叫び。鮮血滴々として散るものこさぞ
散もちぬまさらの花の姿と。忽暴風猛雨のこもれてそこひ香散
ぐ玉砕てこうふ十七歳と一期〳〵。泉下の客〳〵ハ今りけり。
嗚呼哀哉嗚呼痛哉正是三寸氣在千般用。一旦益常萬事休と
いへるとぐひなるべし。かくて現西お清が頭上より切らる。瑇瑁乃
櫛と髪撥と奪取かの布をつゝひて樓をとり。足とをあらて逃失りぬ

第六條　小鰻小平次巧賊僧事
并山井波門月夜殺悪棍事

次の日早飯さくるまでお清樓を下らされた。母親あやし〳〵樓に
上りてみるに。こいいうれお清殺まして血泊の裏に横り居られば大に
驚て魂そらに飛。おいさ〳〵樓を泣ひて。こに〳〵告られ
ば。父三七とびあ。家内の者ども。こ〳〵樓ふあつはて。こと
さつくと騒ぎりう。父母もうともにお清が死骸をあらためるに原
和ゞに裁刀うて。吹と毒理むらいよつゝぬきられば肉白くこぞて疵
口ようこみ出し。鮮血ながれて渾身をそれに染み。歯をくい
しめ眼とあハさぞ面の巻成うくあぎりてあさはゝ〳〵死居られ。
さぞくるし〳〵かりつくんと。おりひやうをして父母ハ。死骸ふひしをとり
つうて声とあげて哭號。こ夢うつゝかけやといいて。牡人の
ごくくりに目もあてられぬあさまる。鄰家の者もはるを寄つけ



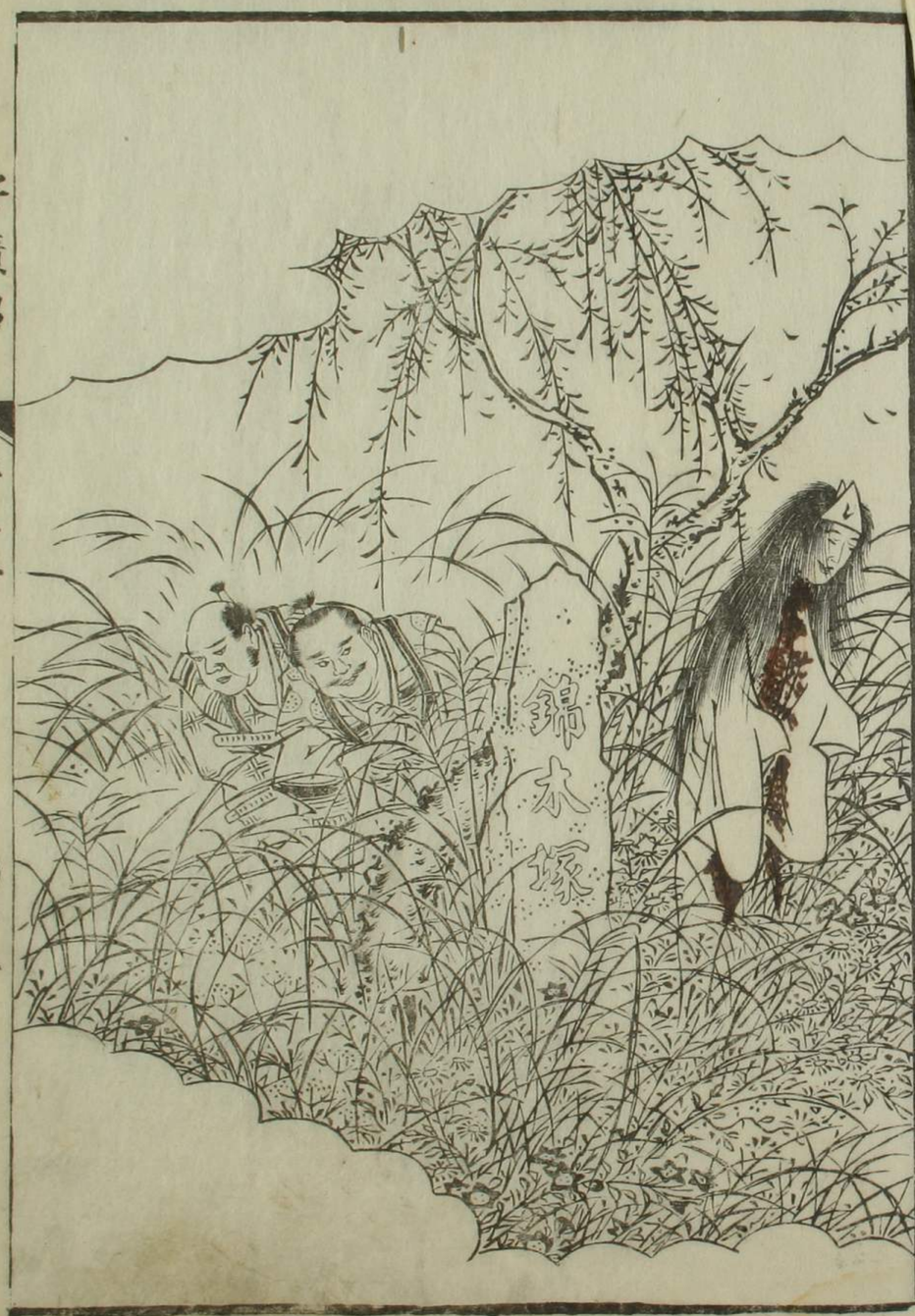


てゝとゝべて三七が家よつどひ。仔者の所為なるやや更に縁由知まざれば。
俄ま[illegible]ら〳〵すりる迦ふ。おのゝ村ふ住義六といふ者原来悪根
ふてあり〳〵ぶかねてお淺と密通〳〵ひ家ぐ新出とおろかれもうけひら
ぢ。ろりて波つと通じるこゝ成ふく迷惑ふおりひ。折とゝりてさ仇と報
んとおもひ形ちんぶけるとゝ密つ幸の対〳〵ム中にろこびゝ家に
こゝ来る三七にむろひていひるハ。むろいの家に住浪人山井波門原足
下の女兒と密通〳〵て樓に忍び通ふこゝ半年に余れり。我人のうゝる
と密〳〵に暇欲波つ迷路の某ゞ家よりて酒を飲〳〵をかゝ已ゞ必彼
酔に乗じて樓に忍び。女兒のんゝ密〳〵るを聞〳〵て殺〳〵るにこゝひ
ゐ〳〵と告られゞ鄰家の老ども也半波つと丹〳〵むりのあり。にとゝを
〳〵ひて義六のいゝ所ゝ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ波つハ[illegible]強勢

を夢にぶ[illegible]ゞ日未明より安佐出の温泉よりて家よあり
ざられゞ三七夫婦いそでゝ怨恨ゞ[illegible]ゞ告狀を出知縣廳
前よさゝげて事の子細を訴ゝ知縣仔来三七が告狀をうけて急波
門をゝ〳〵ゝ。証人義六をちゝめうて鄰家の者。鳥粘の添三。嶽飛沼
の平太。猶戸の橋七等その外一手の者をゝゞて廳前にあてきゝ〳〵む。
知縣先義六ふ事の縁故を問けれゞ義六ゝ出ていゝ〳〵お淺と波つが密
通ハ已に半年に余りゝ。小人等ども近鄰の者ゝふこれと知るゝ〳〵ども。
父母の輩ハゝりて彼等ふあざむられて出るとゝ知ゝ為らゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]

八。我お淺ゞ一旦の情ふ遂ひて復讐の事にみすゝゝ。且丹下屋の大恩を忘れて。今此災を身に招こと。天地神明の罰し如何すべし。こと ふ可慙恥の甚されゝ。八字の白中。得布而擒ゝゝを忘却して。此災を あふこと。我自りゝる処なり。此寃屈の罪ふ一命を失ゞ。別ふ説あゝゝ 父の仇をむくゆべき。百余里をへゞて遠く此地ふ来り。太死をゝとこゝ これ何のむくいぞや。百度千度悔るゞ。此ゆいづくをもいひ知ゝんかを ゝ志を勵し。爰ふよむひていたゝくお淺ゝ密通のゆへ我今死つみ ゞし。ゆるゝと以て罪せゝるゝゝゞ一言といへども速ふ罪ふ伏せんべし。お淺 と殺しゝるゝ実足。我ふあゝゝど。汝何の證拠あって我ふあるゝとゝゝ るや。三七いざら出ていゝく。大爺彼がゝふ而とゝゝ彼奴罪の犯き公白ふて ゝりて罪をかくさんことを。彼奴我女兒と密通のゆ已れ半年ふ余ゝきく。

女兒其情のあゝふんこゝ紙ゝれて来るゆゝれと傍ふへゞて ゝうゞけゝるゝと怒て殺しゝゝふゝゞ。彼密通して女兒ゞ房に 到るの外。別に浮る様上ふのゞゝ何らん是あゝゝゝる彼拠ゝゝ 剣とゝちひゞあゝ何ゝせゝる裁刀ゝて新しゝゝゝ彼一時の怒ふせゝゝて 殺しゝゝゝゝゝゝ。こひ初ゞゝくゝ大爺こゞびしく究問ゝゝ。ゝ さ もゝゝゞ彼白狀ゝゝゝゝゝ。此知縣ふ素甚悲ふゝく到ゝゝ ゝる者ゝ人ゝゝゝゝゞ此時ん年に年ゝゝゝゝ。一ゝゝ征人義ふ美に三七ゝ ゞゝふ部お保ゝゝゝゝゝゝゝゝ。二ゝふゝ彼つゞ人品とゝゝに容貌美ふ て性質和ゝゝゝ人を殺さゞき操秩ゝゝゝゝゝゝゝ。これゝゝ必別ふ孫故ゝゝゝ ゝ和ゝひ乃彼つふ同ていゝく。汝ゝ淺ゞゝゝゝ通ふ時何人ゝゝゝゝゝ夜 中様の下をゝゝゝゝゝ者ゝゝゝゝ。彼つ著ていゝく。ゝゝゝ人の通るとゝゝ。


猿木塚

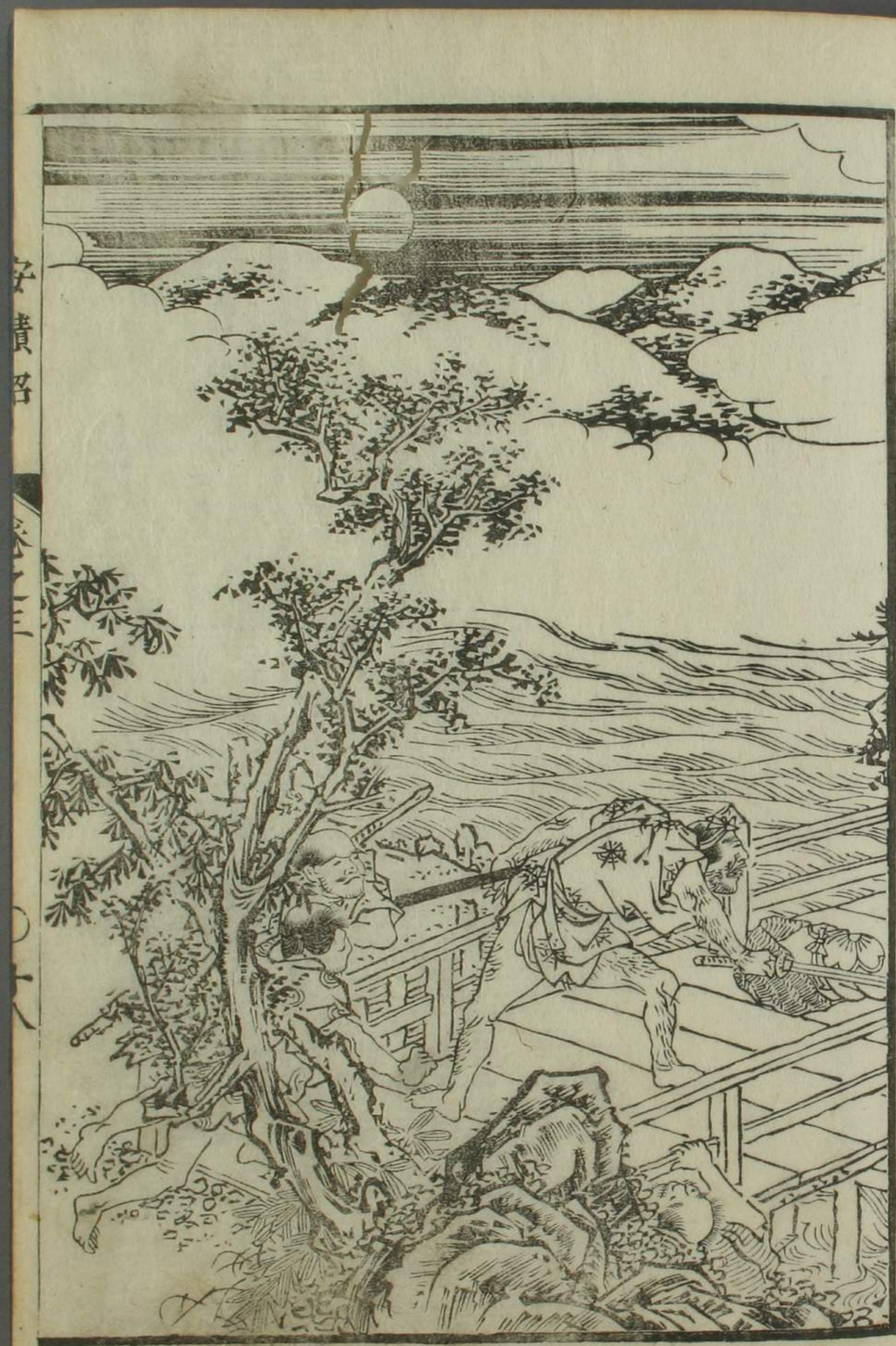
痕

只尚月ふかう一人の僧あるて。夜中紙をとり会仏をとなへて通りぬ。その外に人の通りるをおびゝ伝ゝ。ぞゝろふ。知縣ゝれを見て果哉とん中に跪須つざゝ波つと叱りていひるゝ。汝大罪なゝて人ふその罪とゆゝん とゝるゝゝ。豈よゝ我をあざむゝんや。扨ところゝゝるゝ汝ふきゝはゝりて明白ゝう。永汝を死罪ふ申てゝ。お渋が父母の怨ゝをたゝゝさをべゝ。速に罪ふ伏せゝを唱令ゝ。左右ふ命じ波つとるゝふまにゝらしめて獄舎ふ申ゝう。その余の者ハもべて家ふ返らしむゝて知縣は日ゝきゝる両人の公差。堅河忠左。鹿角義平ゝふ去をとゝび出して。密ふ問ゝる。彼波門ゝふ和の。弟ゝ念仏を唱へて村ゝを勧化ゝる傷いつゝれの石に腰ゝ。汝ゝるゝれと和ゝゝゝ。両人口をひとゝゝし。彼者ハ則小渋沼本塚のゝゝ三昧堂ふ往。現西ゝふ傍のゝゝけ

ゝゝゝ。知縣ゝれを聞て令じゝ。汝ゝ両人今夜ゝゝふゝゝて如此ゝ申ゝゝ。よゝ事成ゝ。汝ゝ功労を賞ゝ。ゝゝゝふゝゝ。人ゝゝみゝけゝゝいゝゝゝへて出行しゝ。知縣ハゝゝふ入て。清ゝゝ。ゝゝ待居る。扨彼現西ハ此夜も老のゝゝ。証ゝゝ。会仏をとゝゝて村ゝ。ゝゝゝ。三更ゝゝる比彼家ゝゝゝん。て。弾木塚のゝゝにゝゝ。時。俄に一陳の風ゝゝて。樹梢をゝし。月色朦朧。て不覚にゝのゝゝ。怪哉錦木塚のゝゝに一道の陰火ゝゝ出て。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

身にまとひうつるとの紙衆に染み〜うるぶ黒暗中にうつておがろ
げふえうう。現西こしをゑ〜めらんるようも。身うちまびき脚をへて走去
こゝあらずゆ忽地に倒伏て。只阿弥陀仏〜〜で念る。出霊白糸
のごゝたをあげてうかゝる黒髪をゝひ。且哭且叫んしる声て
ひるゝ。妾ハ汝ゞ毒手にかゝて冤命に死しる浅ゞ寃魂仇をむく
いんゝゝ。これまぞ〜〜れ来るゆる。汝ゝひて妾と交せんと〜〜うけひゝ
ざる成焼〜ていまゞ陽数もおそ〜〜ぶるに擅に妾と教〜そのうゝ梯髪
掻と貪ゝる。妾その姫をゝうさんと間羅王に訴〜ぶ。閻王ゞ〜のいと
はとゝゆゝ。こん来ゝ汝ゞ一命とゝ〜せらる。ゝゝ〜いえゞも汝今光
非と悔。妾ゞ執念の残り〜〜梯髪掻とりゞ〜ゆゞゝゝ〜〜汝ゞ一命成
赦ゝべ〜〜。さもあ〜ゞんゞ速に地獄ふみて行てがぶゝゆん呵責とう

け〜むべ〜〜と息もゝあげふゝ。現西ハ面色槁木のごゝ〜〜て変恰も死〜
ゝる物のごゝ〜地ふ倒てあゝるゞ。これときてゝゝ〜〜〜



小まにてうち殺す。現西まち〳〵わゞ泣き。魂魄を失ひて。両鬼我と曰る。せく〳〵と叫〳〵ぶ。あ人よゞらていち〳〵。我輩ハ鬼にあらず。知縣相公のあゝせ給うけて汝とゝらん。廳前にあて行こゝゝゝ

罪なきものあるべきとなり。原か浅ぎ縊死んらんと様しよう。支起るさまば
ちからく其罪を赦して。ようやくに放ちくべしといひてやすめとりと
められば。波門は只龍潭を避虎穴を逃るるこちしやり相公の恩沢ふ
かくどんば我忽図圄の鬼とうべし。相公は我をあれ再生の父母なり。ば
大恩いづれの時か報ぜらんといひ。さきに感謝してよろこびる。
知縣又金五両とりて小鬟小平次とあり銀子とりて忠を義平
あ人ものあるべくその功労を賞す。一手の者どもさべて退りあれば。
皆く知縣の判所あらかあて賞罰の正しきこと感ず。拜謝し
て家かえりて波門は幸あり。て災と脱れども孫事を惹出し
れば。星も位うく思ひ且仇人のやうなるもあるべきれば
いづれの日か宿志をとげる朝あらん。ばうんは諸國をめぐりてゆくえを探

小ちゝと思案をこらあ。俄ち家をとりとめ。旅虚無僧ふ身を変して。
秋まに彼里を立去る。若仇人奥ふかくかくれるも知るべしとおもひて
津路の方をたづねべ。ぜん青表の渓に赴くべやと走去りる時しも
秋の半ばて。物うくの淋漓霄ようはらくてぎりる。皿更の比に
いつう空をくしく晴て。明月漸水上に印し。栖鳥已に曉色に
遂ん比波門行のゝもゝ一つの橋をとる所に。號笛しおぐしく一声を
えいりぶ忽竹林のうげ枯草の裏。ようかしとよう六七人の男大腰刀とか
びてあらはれいで波門をまもりにひれはく。一言の門答もなくば。
茶後ようりつれて。三三五三にくんとと波門はおりひげける
ものなれども。大丈夫の魂なれば。這奴ら賊人かも
るべしとも。ものあれ何程の家ぞあん家曽学ひ得る術は

かるはこそうちうべり行とん中にをひ身を撓り御を乗さて一人と橋の上に蹋倒し。又一人とうちて努につきて投うち投ぐ所ひかけども掴手をうちて。川に撞こうちこゝろぶうち頭とみがき大男波つが眼あらうふ手快をうんて。ぶうにぶんハかのふまどを力を抜て力をうとしうが高余の者も面くれ力をうひてむひうち波つ月の丈うりて大男が面をうるに此者ハ彼義仁をうり投ぐ大ふようがりて いうく。汝此処ゆうちぶせして又我と害ぶんとをうる。我こそ義の敵さを好ぞとい人ども。今ハうや敵ーぐこうひて帝釈ふ仕こうる氷のでうれ力を抜出ーうやく地獄ふ堕けといいなぶうとうて義仁を肩尖うる瞎をうけて斬つけうれば。阿ゝ叫ぶひまもなく忽あ陸にうれて地上に撲地ーうれうう。其余又人の悪棍ども。ふ四方

うう所ともむ知ぞ。ふを閃て蹋倒し。跳越て後ふあうハれ。其敵さし捨も。ふを又ハ因電光にひうくく。水上に龍ふ燕子に似て。彼年若丸ぶ五條橋のそうれと。今まれあうるがおうく。おぶうくれ間ふこ人と斬敵さ。ふ余の者も或ハ或ハ義仁を義敵くれうて逃去うう紛ば。波つ遁ゆれて尽く敵んと毋すひしぶ。彼義仁を敵ーうう九義仁をうーぶひふ波ふと奔ぞをうぬ。彼義仁前ふ波門を矣んと計うう。うて物の色罪せうれ郡の境とおうれて。ふ逢所れぞ波門ぶ什ぞをうるを知う。男波つハ武義の達人と安うれば。人のうううさゆうん勝れまぞと思ひ。因氣お求る悪棍どもをかゝうひば船ふうれ居て事を仕損ドううておのれ多一命を毋ーぬ。原義六ハ舊悪

おもひ入れ者ふて。そ余の者も盗賊のとがひまれば後日新人の食義もあるべきなるべしこれ波門ぶ月の幸なりしか。板又須賀屋三七ハ。女児お濱が非命に死しるとうるこゝ。妾とうれこゝれ井りひて家を殺の某れゆゑ。おのれい死をあらしこゝ。きく弟とこゝ。安積沼須賀川の郷にうれ。深く仏をふ入りて。元禄のゝ九十余歳あて正念往生をとゝげるとゝ。俗諺土芭蕉が。奥の細道小須ケ川の宿のうさ八ゝれ。大きなる栗の木の陰とゝまりて。安積いとふ侍ありしうれて

妾の人ゝ見ぬ花やゝ新の栗

といひしゝ山三七道心のゝ。陸奥人の物語ゝ安積沼巻之三畢